

# 2021' 9 DancersWeb

トップインタビュー Vol.74



## 小林十市 / ダンサー・振付家

「“脱・ベジヤール”を目指します」

24歳の若さですでに、巨匠モーリス・ベジヤールの振付アシスタントとしての地位を確立していた元モーリス・ベジヤール・バレエ団(BBL)のダンサー、小林十市。BBLの中心的ダンサーとして活躍していたが、腰椎椎間板変性症のため34歳で惜しくも退団。その後、35歳から演劇の世界に身を置くが、踊りへの想いが断ち切れず、再びダンスの世界に戻ってきた。

—6 歳頃からバレエを習いはじめたそうですが、「自分はバレエに向いてないかとも思っていた」とおっしゃっていたのはとても意外でした。



—近藤良平さんからのオファーで、2015 年に「近藤良平のモダン・タイムス」に出演されましたが、久々の舞台はいかがでしたか？

心底楽しかったです。こんな公演もありなんだ！と衝撃的でした。良平さんの構成の組み立て方も新鮮で、創作過程も楽しかったですね。

まず、構成を考えるのに 100 パターンぐらい創るんですよ。本番ではそこから半分ぐらいしか採用しない。

良いアイデアだなと思うのも使わなかったりして、もったいないぐらい。40 人ぐらい出演者がいるんですが、僕にはソロパートを創作してくれたり、気を遣ってくれているのかなと

思いました。

—2021 年 7 月に、5 年間続いたフランスのオランジュ・バレエ・スクールを閉講されましたが、スタジオに丁寧に挨拶してからの”別れのピルエット”の動画が印象的でした。SNS はパフォーマンスの場だとも思っているので大袈裟に演出する時もあったりします（笑）。

2016 年にオランジュ・バレエ・スクールを開講して以降、2020 年 3 月にコロナウィルス拡大によるロックダウンがあり、初めてのオンラインでどこまでレッスンができるのか。どのように継続していくかの問題に直面しました。今回、スタジオを閉めるにあたりやはり寂しい思いはありますが、人生での分岐点のような感じだと思います。

—「Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2021」のディレクターの就任と出演のニュース に多くのファンは歓喜したと思います。

Dance Dance Dance @ YOKOHAMA のディレクターのお話をいただいた時、コロナ禍という状況において、海外招聘は難しいというところから、プログラムの輪郭がみえてきて、そこで今回は、日本のダンサー、カンパニー、もちろん市民の方も含め、共にフェスティバルを作ろうと考えました。

そこでまず企画したものが自身の身体に向き合う「エリア 50 代」でした。僕は「エリア 50 代」をテーマに踊る『One to One』というソロで出演します。フランスの振付家アブー・ラグラさんに依頼しました。

最初の振付のオファーの時に僕の腰の状態について話したところ、テーブルを使った振付を考えてくれました。そこに身を委ねたり脱力して腰に負担がかからないようにと気を遣ってくれました。そのテーブルを用いたことで、アブーさん自身も新たなインスピレーションが沸いたと言っていました。

ソロは 2021 年 5 月に本格的に創作され、7 月に 1 日だけ公開リハーサルの形式で約 80 人の前で 2 回に分けて踊りました。お客様は、僕の身体表現というフィルターを通して自身のストーリーを通して観ている。

観た人それぞれが自分自身を振り返り内観しているんです。そういう自己投影の機会になっているのかもしれない、という発見がありました。僕はこのソロでこれまでの経験が舞台でどう滲みでてくるのかひとつ一つ丁寧に味わいたいと思います。

—「エリア 50 代」はほかに、近藤良平さん、安藤洋子さん、伊藤キムさん、平山素子さん、そして TRF の SAM さんがソロで踊りますね。

自分以外の振付家に創作してもらうのがコンセプトなんですが、本作では、50 代の肉体を持って「自身とどのように向かい合うのか」「なにをどう表現できるのか」を追求します。

—10 月には『Noism Company Niigata x 小林十市』で、金森穰さんと初共演で出演されます。

フェスティバルのプログラムの構築にあたり、自分のバックグラウンドや横浜と新潟のつながり(東アジア文化都市)があることから、Noism Company Niigata との作品がクロージングにふさわしいと考え、金森穰君に相談したところ、快諾をいただきました。

この前、穰くんから、僕が踊るパートの動画が送られてきたんですが、「これをやるの!？」と焦りの感情が先にきました(笑)。

金森くんはとにかく身体能力が抜群で、自分のツアー先で彼の公演を観に行く機会もありました。穰くんが NDT 在籍中やリヨンにいたときも彼の舞台を観ています。

もちろん僕にとっては後輩な訳ですが、優れた舞踊家、演出家、振付家である彼と仕事ができるのは本当に嬉しいことです。この舞台の稽古はこれからになりますが、はじめていっしょに舞台に立つのが楽しみです。

—今後はダンサーの活動が主になるのでしょうか？

これまではバレエ・スクールがあったので、夏休み中の7、8月しか空いている時間がなかったし、その期間中にうまく舞台出演の話もなかった。でもバレエ・スクールも閉めてフリーとなった今、もし可能ならば今後は自分がやりたことを優先させたいですね。

振付に興味がないわけではないですが、僕は振付家のタイプではないと思う。なので、やはり舞台表現者として舞台に立ち続けたい思いはあります。

—演劇の世界ではセリフ覚えが早かったとお話されていましたが、振付の覚えも早い方でしょうか？

そうだと思います。近藤良平さんの「モダン・タイムス」でもアンサンブルのグループが何組かあって何パターンかそれぞれ違う振りを踊るんですが、僕は1回見ただけでほぼすべての振りが頭に入りました。集中してかなり気合いが入っていたこともあるかもしれませんが(笑)。

—それは特殊能力だと思います！その能力の高さもベジャールさんはご覧になっていたと思いますが、特にどんな点が評価されていたと思われますか？

おそらく、ベジャールさんが望んでいる動きを即刻体现できたからだと思います。

「理屈で伝えるよりも、見せて伝える」ということを僕は重要視していました。現役中の14年間で2回ベジャールさんに「ジュウイチは僕のスタイルを熟知しているね」言われたことがあります。

一つは『ボヤージュ・ノクターン』という作品のソロパートを振り付けて貰っている最中に、そして、もう一つは僕が「中国の不思議な役人」という作品の男性の群舞を教えているときにベジャールさんが稽古を覗きに来て同様の言葉をかけてくれました。認めてもらえた！という思いで鳥肌が立ったのを覚えています。

ベジャールさんはもちろんですが、ジョルジュ・ドンさんの終盤の頃に一緒に活動できたり、昔からのファンであるミハイル・バリシニコフさんとは、SAB(スクール・オブ・アメリカン・バレエ)へ留学中に、同じクラスでレッスンをした経験もあります。「うわ！ナマ(生)・バリシニコフ！」と感激しました。

現在、BBLの芸術監督であるジル・ロマンとは多くの舞台で共演させてもらえて、振り返ると僕は時代に恵まれ、すごくラッキーだったと思います。贅沢な時間を過ごして来ました。

—ジル・ロマンさんはどういう存在ですか？

今でも会うとなぜか緊張するんですが、同じ人間の気がしないんですよ。別格な人なんです。数々の作品で何度も同じ舞台に立ちましたが、ジルは今でも現役のダンサーとしても活躍している。すごいと思います。

この前も BBL のフランスツアーの舞台で、僕を関係者の一員として手厚い待遇をしてくれて、今でもとても良くしてくれる。本当に感謝しています。

ベジャールは、ジルと僕、クリスティーヌ(・ブラン)をベースに多くの作品を創作してくれましたが、クリスティーヌは 16 歳で BBL に入団しているので、ジルにとっては娘と同じような感覚なんです。

これはだいぶ後になってジル本人に聞いた話なのですが「彼女は将来、誰と付き合うんだろ？」ということがジルにとってすごく気がかりだったみたいです。あとになって、それが僕だったので本当はどう思っているのか分かりませんが(笑)、今でも 3 人の信頼関係はとても強いです。

—これまでの出演舞台でターニングポイントとなった作品はありますか？

2002 年に中村歌右衛門へのオマージュとして、ベジャールさんが僕のために振り付けてくれた『東京ジェスチャー』です。僕は 2000 年に足の小指の骨折をしていて、怪我をする前は「結果をださないといけない」という思いが常にありました。でも、怪我が治って舞台に復帰してからは、シンプルに「舞台を楽しみたい」という思いが強くなりました。

そういう僕の姿勢を見て、あるときベジャールさんに言われたんです。「ジュウイチ、君の踊りの何かが変わった。君に振り付けたいと思っているんだけど…」でも、そこから先をなかなか言ってくれない(笑)。

なので、「それで？」と聞き返したら、「私に振り付けてもらいたかったら、ダンサーからリクエストするのが普通じゃない？」とおっしゃるので、「いやいや、そんなの普通で きませんよ」と返したんですが、結局「振り付けてください」とお願いしました(笑)。

好きな曲があったら教えてというので、「ワーグナーで踊りたい」と伝えたところ、彼の中では身長が高い人のイメージだったみたいで、ほかの候補を考えることになりました。ベジャールさんは何を題材にするかも結構悩まされていたようで、カフカの「変身」を打診されたんですが、「僕、昆虫が苦手なんです」(笑)ということで、試行錯誤の結果、「中村歌右衛門」に決まりました。“変身”というイメージをもとに、ある青年が女形へ開花していくというインスピレーションが閃いたようです。

—「ダンサーとしての美学」はありますか？

身体能力を向上させること。日々の熟練に尽きます。どう自分に向かい合い続けるか。

—今後の活動を教えてください。

やりたいことを模索してゆきたい。まずは、自分の肩書きにある「元ベジヤールダンサー」から現在踊っている「ダンサー・小林十市」になるために舞台上で場数を踏みたいのです。

コンテンポラリーにも興味があるので、今回を機に方向を少し変えて「脱ベジヤール」を目指してみたいです。

#### 【公演情報】

Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2021

「エリア 50 代」

2021 年 9 月 23 日(木・祝)～26 日(日)KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ

<https://dance-yokohama.jp/eventprogram/008/>

Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2021

「Noism Company Niigata x 小林十市」

2021 年 10 月 16 日(土) 、17 日(日) KAAT 神奈川芸術劇場ホール

<https://dance-yokohama.jp/eventprogram/011/>

#### 【小林十市プロフィール】

1969 年生まれ。1979 年に小林紀子バレエシアターでバレエを始める。数々の賞を受賞し、1989 年、スイスのベジヤール・バレエ・ローザンヌ(BBL)に入団。『春の祭典』、『火の鳥』、『くるみ割り人形』、『シエラザード』など数多くのベジヤール作品に出演。BBL を退団後、世界各国のバレエ団にベジヤール作品の振付・指導を行っている。2004 年『エリザベス・レックス』で俳優デビュー。以後、テレビドラマや映画、ラジオなどに出演するなど俳優、ダンサー、振付家として活躍。現在はフランスを拠点に後進の指導にあたっている。祖父は落語界初の人間国宝、故・五代目柳家小さん、弟は噺家・柳家花緑。